こえに　だして　よみましょう。

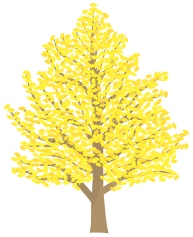
いちょうの実（み）　①

宮沢賢治（みやざわけんじ）

そらのてっぺんなんかつめたくてつめたくてまるでカチカチのやきをかけた鋼（はがね）です。

そして星（ほし）がいっぱいです。けれども東（ひがし）の空（そら）はもうやさしいききょうの花（はな）びらのようにあやしい底光（そこびか）りをはじめました。

その明（あ）け方（がた）の空（そら）の下（した）、ひるの鳥（とり）でもゆかない高（たか）いところをするどい霜（しも）のかけらが風（かぜ）に流（なが）されてサラサラサラサラ南（みなみ）のほうへとんでゆきました。

じつにそのかすかな音（おと）が丘（おか）の上（うえ）の一本（いっぽん）いちょうの木（き）に聞（き）こえるくらいすみきった明（あ）け方（がた）です。

いちょうの実（み）はみんないちどに目（め）をさましました。そしてドキッとしたのです。きょうこそはたしかに旅（たび）だちの日（ひ）でした。みんなも前（まえ）からそう思（おも）っていましたし、きのうの夕方（ゆうがた）やってきた二（に）わのカラスもそういいました。